

1 高時川流域の水利

○伝統的な井堰慣行

湖北地方は、東海、北陸、近畿の結節点にあり、古くから戦乱の舞台となってきました。この地域で戦国時代のころに定着した水利慣行の中で、組織間の申し合わせによって、通例とは異なる特徴を持つに至った事例を紹介します。

◆高時川 餅の井をめぐる慣例 餅の井落とし

現長浜市木之本町の高時川と杉野川が合流する付近では、中世以降、渇水になると、右岸側下流の井堰組が、左岸側の上流にある餅の井の井堰を取り壊し、下流への用水を確保する、という慣例ができました。

右岸下流の井組は、餅の井組に事前に申し合わせた上で、数千の農民が隊列を組んで餅の井に向かい、餅の井組と口上を取り交わします。例えば、大正11年の口上は以下のようなものでした。『右岸「用水困難につき井落しを願いにきました。なにとぞお許しを懇願」左岸「しからば古式に違反すること断じてなりませぬ。万一違反の行為あらば容赦せんぞ」(※1)』右岸下流井組は餅の井を取り壊し(B-5 扉絵参照)、再び隊列を組んで引き上げていきます。その後、餅の井組は、隊列の後ろ姿が見えなくなった後で、井堰の修復に取りかかるのです。

このような慣例は、渇水が起こるたびに行われ、記録によると大正11年には『6月に1回、8月にも1回、9月には実に13回(※1)』計15回も餅の井落としが行われたようです。昭和時代に高時川の水利状況が改善されるまで、慣例は続けられました。



▲両岸代表の対峙(長浜市)
[一般社団法人 農業農村整備情報総合センターホームページ『水土の礎』より転載]



▲引き上げる白装束の隊列(長浜市)
[一般社団法人 農業農村整備情報総合センターホームページ『水土の礎』より転載]



▲餅の井立て(井堰づくり)(長浜市) [提供: 滋賀県]

餅の井落としの由来

餅の井落としの慣例は、どのように成立したのかを見ていきます。

戦国時代、高時川の水利は、右岸側を井口氏が管理し、左岸側は浅井氏の支配下にありました。餅の井は、左岸川の浅井氏の所領に水を導く井堰ですが、最下流にあるため、農民は取水に苦勞していました。

浅井亮政が次第に台頭し、井口弾正は、浅井氏の支配下に入るようになりました。亮政の息子久政は、弾正の娘を娶り、高時川からの取水に苦勞している農民のために、餅の井を右岸側の井堰よりも上流に移すことを、弾正へ要望しました。弾正は葛藤に迫られます。餅の井の移設を許すと、自らの領民の命の水が危機に瀕しますが、久政の頼みを無下に断るわけにもいきませんでした。

そこで、弾正は『「錦千駄、綾千駄、餅千駄」と引き換えに」という破天荒な取引を申し出ました。*「駄」

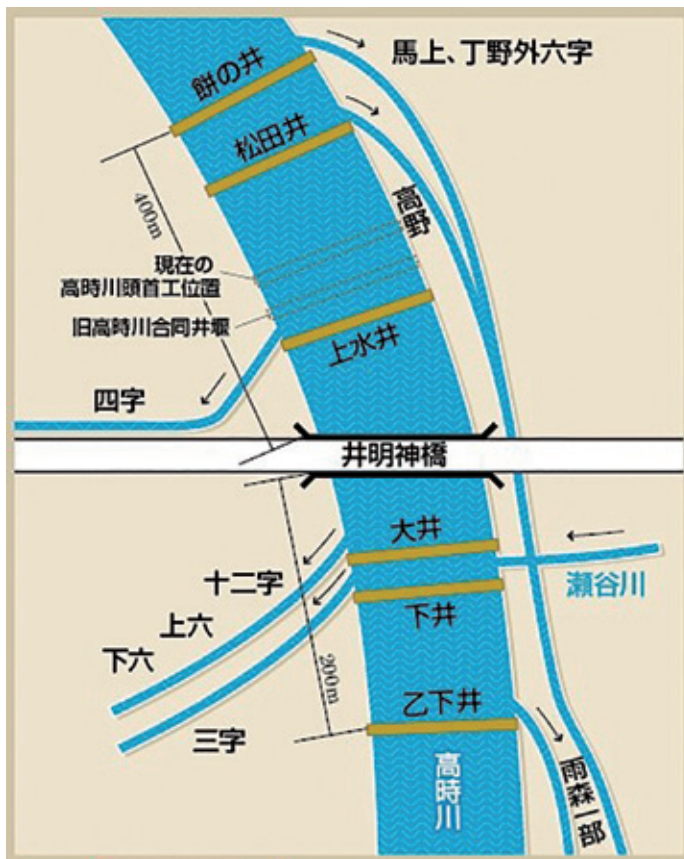
は馬一頭に背負わす重量で約 36 貫 (135Kg)。「綾」とは布のこと。(※3)』すると、『「せせらぎ長者」と呼ばれる左岸・中野の豪農が三千駄の荷物を届け、弾正は餅の井の上流移転をやむなく認めた (※1)』のです。

ただし、その後の久政の書状には、『飢水になり迷惑の時は水まかし到さるべく候 (※1)』とあり、渇水により、右岸側の「飲み水」が少なくなったときは、餅の井を破壊することを許しています。この右岸側への思いやりが感じられるやりとりが、その後 400 年続く餅の井落としの慣例を生む原点となりました。

※引用 1「湖北の祈りと農」

(参考)

「特集 湖北用水史」,『みーなびわ湖から』
126 号, p.14-16, 22-25, 長浜みーな協会
一般社団法人農業農村整備情報総合センター (2009)「湖北の祈りと農」
<<http://suido-ishizue.jp/nihon/kohoku/index.html>>
2017 年 2 月 14 日アクセス



▲かつての餅の井堰付近の様子

「一般社団法人 農業農村整備情報総合センターホームページ」
「水土の礎」より転載

コラム

伝説が残る農業水利

◆せせらぎ長者

中野 (虎姫町) に「せせらぎ長者」と呼ばれる豪農がいました。長者は、餅の井を中野まで開削すべく私費を投じて、ついに村中総出で完成させました。しかし、地形上の無理もあり水は流れてきませんでした。長者の落胆と村人の怒りを目にした娘は、再度の奮起を図るため、神に祈り、その身を村人の掘った水路の深みに投じたのです。娘の死に感じた村人は猛然と立ち上がり、ついに中野まで水を流す水路が完成しました。

しかし完成の前夜、神に感謝した長者はこの水路の守護神となることを願って自らの腹を割き、続いて長者の夫人も餅の井の守護神となることを祈って池に身を投げたのです。娘の死に際して、餅を供えた場所 (餅の井の由来) に井明神社が建てられ、今でも毎年、長者祭りが行なわれています。

(参考)

一般社団法人農業農村整備情報総合センター (2009)「湖北の祈りと農」
<<http://suido-ishizue.jp/nihon/kohoku/05.html>>
2017 年 2 月 14 日アクセス



▲せせらぎ長者の碑 (長浜市)
[提供: 滋賀県]

○現代の水利施設

◆湖北農業水利事業

草野川、田川、高時川、余呉川沿岸の5,000haの水田地帯は、常に用水が不足気味でした。戦後、食糧増産から高度経済期へと移り変わっていく中で、湖北地域では、琵琶湖の水循環を含めた総合的な農業水利事業が展開されました。

余呉湖のダム化

昭和31年、余呉湖を治水・利水ダムとして利用する計画がスタートし、昭和33年に完成を見ました。この計画は、余呉川の流れの一部を、余呉湖への導水路でバイパスさせることで、水を余呉湖に貯留させて、再び余呉湖から余呉川へと、放水路によって水を戻すことを可能とするものです。余呉湖の水位を、人為的に調整することが可能となり、余呉川の治水が著しく向上しました。

余呉湖への琵琶湖揚水と、高時川や草野川への導水

余呉湖の水をさらに用水として活用するために、昭和40年に湖北農業水利事業が開始されました。この事業は、琵琶湖に揚水機場を設置して、琵琶湖の水を余呉湖にポンプアップすることで、遠く離れた高時川・草野川に導水する計画でした。こうして、無限ともいえるべき用水を琵琶湖から得ることができるようになり、河川掛かりの用水不足を補うことが可能となりました。

この事業の結果、地域内の用水利用は、琵琶湖と余呉湖からの水がおよそ4分の1（推計）を占めるようになり、地域の農業用水不足の解消と、農業生産の安定に大きく寄与しました。

新湖北農業水利事業

昭和62年に湖北農業水利事業は完了しましたが、その後の営農形態の変化によって、必要用水量が増加する一方、水路の老朽化等によって、用水が不足するようになり、用水の

確保や施設の維持管理に多大な労力と費用が負担となりました。

そこで、琵琶湖から余呉湖への揚水機の増設や、水路の改修を行う新湖北農業水利事業が計画されて、平成10～21年度に実施されました。

この事業では、洗い場や水遊びの場など、かつて農業用水路で行われていた多様な利用や、景観、防災といった機能を見直し、地域用水として位置づけていく取り組みも同時に進められ、集落の環境改善や景観の向上にも、大きな役割を果たしました。

(参考)

農林水産省近畿農政局淀川水系農業水利調査事務所編(1983)『淀川農業水利史』p.288-291, 農業土木学会
『特集 湖北用水史』、『みーなびわ湖からー』126号, p.42-45, 長浜みーな協会
農林水産省近畿農政局新湖北農業水利事業所(発行年不明)『新湖北農業水利事業』
<<http://www.maff.go.jp/kinki/seibi/midori/jigyuu/kohoku/05works/index.html>>



▲余呉川総合開発（長浜市）[提供：滋賀県]



▲余呉川頭首工（長浜市）
[提供：水土里ネット湖北]



▲草野川頭首工（長浜市）
[提供：水土里ネット湖北]



▲湖北地域の農業用水 [一般社団法人 農業農村整備情報総合センター
ホームページ『水土の礎』より転載]